九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

松本清張初期小説の方法 ： 『小説研究十六講』を補助線として

曹, 雅潔

https://hdl.handle.net/2324/4110573

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（様式３）

氏　　名　：曹　雅潔

論 文 名　：松本清張初期小説の方法―『小説研究十六講』を補助線として―

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論の目的は、松本清張の初期小説について、語り・人物造型・舞台設定の視点から検討することで、その創作方法を明らかにするとともに、個別作品の具体的な読解を示すことにある。その際に、清張自身が創作上の手引きになったと述べている木村毅『小説研究十六講』の語り・人物造型・舞台設定に関する記述内容を参照・対比することを基本的な分析方法として用いている。両者の検討を通じて清張の受容の様相を考察するとともに、個別の作品に即した転用や援用の様相についても検討することで、作品の創作方法と読解上の問題点を指摘している。本論文は、序章、本論、終章、参考文献、付記（初出一覧）から成り、本論は、語り・人物造型・舞台設定に応じた三部立てで各部それぞれ二章からなる六章構成となっている。

序章は、論文の目的、基本的な方法として木村毅『小説研究十六講』を用いることの説明、本論文の考察対象の範囲、関係する先行研究の紹介、本論の概要を記している。

第一部では、語りについての視点に注目し、『小説研究十六講』の視点の項目と対比しながら、清張がどのような視点の処理を行い、どのような語りを採用しているのかについて考察している。「赤いくじ」と「西郷札」を事例に分析している。

第一章の「赤いくじ」において、語り手は、物語を進めながら、しばしば顕在化してストーリーに介入している。その仕組みは、語り手をストーリーそのものとは関わりのない立場、あるいは遠い未来の立場に立たせ、〈超越的な語り手〉の姿勢を獲得させる。語り手は、読者に対して傍観者的な姿勢でストーリーを語り、事実を分析し、評価を下す。物語世界内に介入した語り手は、作者ではないが、作者の内面を代弁し、無限に作者に接近している存在だと言える。松本清張は、自身の意図や倫理観を誤解されずに読者に伝えるため、意識的にそのような語り手を作中に持ち込んでいると考える。作家出発の初期から清張が備えていた〈語り手の介入〉の手法は、清張が小説からノンフィクションの領域に進出していくプロセスにおいても大きく作用したと考えられる。

第二章の「西郷札」においては、語りの問題や特色が、作中の『覚書』の三人称での転記にあることを指摘している。それにより、〈語り手の介入〉が可能となるが、本来は書かれてはいけない出来事が書かれるという〈語り手の破綻〉も起こっている。そうした〈語り手の破綻〉の解釈として、主人公（雄吾）の暗い一面を隠蔽し、塚村の「裏」を浮き彫りにするという戦略上の必然があったことを指摘している。高級官僚の「裏」を描出しようとするモチーフは、清張の後年の小説にまで受け継がれていった問題であり、最初の作品にその萌芽があったと考えられる。そのような作品の位置づけとともに、作品読解としては、作品末尾の「最後の策」について、その設定が単に「読む人の想像に任」せるという自由な裁量というより、「最後の策＝復讐譚」の方向性と輪郭を暗示するものとして機能することを指摘している。

第二部では、人物造型法について「或る『小倉日記』伝」と「張込み」の女性表象を事例に検討している。

第三章の「或る『小倉日記』伝」においては、清張の人物造型法が性格設定に比重があり、そうした造造型が、評伝小説における事実の改変と関係することを指摘している。「或る『小倉日記』伝」において最も重要な改変は、主人公の耕作と母ふじの生没年および家族構成をモデルの現実とは異なるものにしたことである。その背景には、清張自身の母子関係が作中の母子関係に投影していると解釈される。自身や母タニなどの現実を投影する人物造型のありようは、「或る『小倉日記』伝」だけでなく、「西郷札」「火の記憶」「断碑」「張込み」など、清張の初期小説に通有する一面があり、そのことが初期作品における女性表象に制限を設ける結果となっている。そのような視点から中期以降の女性表象との関係という問題を浮上させている。

第四章の「張込み」においては、主婦像を考察している。刑事に〈覗き見〉られた主婦の生活が捉えられることによって、一主婦の日常と非日常が対照的に強調される。そうした設定の背景には、「張込み」が読まれる一九五〇年代における主婦運動の発展および『婦人公論』誌などのメディアにおける主婦のあるべき姿に関する言説や思想が絡んでいる。「張込み」の主婦が代表するのは、束縛された家庭生活に耐えられず、家庭から逃走するが、結局は逃走に失敗し家庭への回帰を強いられる女性像である。上記の分析から、清張の中期以降の小説における「悪女」表象が、主婦の逃走願望や意識内部に胚胎した欲望などを実践するという要素があることを指摘し、その意味で、「張込み」は、清張作品の展開の上で、推理小説への転機というだけでなく、女性の人物造型法の点でも、重要なポジションに位置付けられる作品として位置づけた。

第三部では、『小説研究十六講』の舞台背景や風景に関する記述を参照項として、第五章で「湖畔の人」と「火の記憶」を第六章で「啾々吟」と「恋情」を事例に検討している。

第五章の「湖畔の人」と「火の記憶」においては、清張作品における風景の意味と働きについて分析している。両作品ともに、主人公が行為する舞台背景が複数用意され、主人公がそれら異なる舞台を行き来することを指摘し、舞台背景の設定が、時間軸の面では「視線－風景－記憶」の連鎖と関係し、空間の位相の面では、「水」と「火」の表象が異なる舞台を媒介する機能を持つと指摘している。その上で、「水」と「火」のいずれもが幻影のイメージや虚構性と結びつくと解釈している。「水」と「火」の風景表象は、両作品のタイトルにも関係するだけでなく、以後の作品においても多く使われ、その表象する意味も上記の分析結果の延長で理解できる。清張作品における舞台背景や風景の読解の重要性を改めて再確認するとともに、個別作品に即した具体的な舞台背景の読解を提示している。

第六章の「啾々吟」と「恋情」においては、両作品の間にプロット上の強い結びつきが見られることを指摘し、その背景として「啾々吟」のタイトルの典拠となった王陽明「啾々吟」の詩の風景に対する清張の解釈を関係づけている。「啾々吟」の場合、作中の中心人物である「嘉門」だけでなく、「嘉門」の運命を見届けた「予」も、王陽明の「啾々吟」の風景からは差異化される人物造型として解釈される。それに対し、「恋情」では、「天の機会を待つ」主人公の「己」の姿に詩「啾々吟」の含意が投影されている。清張は、この後も、権力に抵抗しようとしても悉く失敗に終わる人物を描き続けるが、その裏面には陽明思想的な人生観への希求が働いていた可能性があり、両作はそれを物語る痕跡の一つと評価する。

終章では、本論各章における要点を整理するとともに、全体を通して、初期作品の方法や読解のモデルが、いずれも「点と線」に始まる社会派推理小説を中心とした中期以降の作品とも密接に関係する祖型となっていると結論づけた。